なぜフクシマに原発が

脆弱な国家

原発事故による放射能拡散の被害は全国に及び始めた。

稲わらが放射能に汚染され、それを餌として与えられた牛の肉から食品衛生法の暫定基準値を上回る放射性セシウムが検出されたのである。その範囲は、福島、宮城、山形、岩手、栃木の5県に広がっている。

原発事故の恐ろしさである。

当時の東電社長木川田一隆氏（左、『私の履歴書』日経新聞社より）と原発の誘致を決めた佐藤善一郎知事

もっとも専門家によると、牛が体内にセシウムを取り込んでも、尿やふんで大部分が排せつされ、2、3カ月で半分、半年で8分の1程度になるとされ、「すぐに出荷せず、半年程度待つべきだ」と話しており、それほど心配はないという。しかし、東北の牛肉は食べないという風評被害は強まるだろう。

その影響は甚大である。

これは放射能の拡散を予測できなかった政府の無能さがもたらした人災だった。

日本という国は、ひどく脆弱である。

北朝鮮による拉致問題の頃から私は日本政府の情報収集能力に疑問を抱いてきた。放射能の拡散もアメリカの無人偵察機によって集められたデータでようやく分かったもので、独自では何も調べられないお粗末さである。

とても独立国家と言えない危ういい国が日本だった。

過疎対策

そもそも、なぜ福島県に東京電力の原子力発電所が建設されたのか。

その背景には、双葉地区の過疎問題と当時の福島県政の積極的な誘致活動があった。

昭和30年代の福島県は高度経済成長の波に乗って、いかに地域を発展させるかに懸命だった。

当時の福島県の企画部長菅野光弥は情報通だった。

佐藤善一郎知事の側近中の側近で、知事とは親戚だった。

「菅野君、東電は本気だな」

と知事が言った。

「間違いなく双葉に決まるでしょう」

「何かと忙しくなるな」

知事がうなずいた。

「しかし、原発ですから慎重を期す必要があります」

「その辺もよく調べてくれ」

と知事が付け加えた。

百姓知事

大竹作摩の跡を継いで、昭和32年に福島県知事となった佐藤善一郎は通称・善ちゃん、世間では百姓知事と言った。

それは差別用語ではなく、農業県福島の代表という意味だった。

佐藤が政界に出たのは41歳の時だった。家は代々大地主で、父利助が信夫郡清水村長（現福島市清水）だった。

その父が病死し、村長にかつがれた。

その後、佐藤は進歩党に入り、県

今回の津波で大熊町も8世帯11人の死者を出し、1人がまだ行方不明になっている